



関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

飛鳥の夏祭り見物記

著者	森 隆男
雑誌名	昔風と當世風
巻	84
ページ	1-5
発行年	2003-04-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/1832

飛島の夏祭り見学記

森 隆 男

はじめに

岡山県笠岡市沖に浮かぶ飛島ひしまでは、毎年八月五日（旧暦六月十八日）に、氏神の夏祭りが行なわれる。小飛島に鎮座する島神社の神輿が「御召船」に乗って大飛島の二か所の御旅所に渡御するもので、島外に出ている人も帰省して祭礼に参加する。盆には帰らなくても夏祭りには帰るといふ人も多く、祭りが人々

の心を結び付けている。古老は以前に比べて活気がなくなつたと嘆くが、神輿の担ぎ手があげる「オリヤ オリヤ」の掛声が島内に響き、かつてのにぎやかな漁民の祭りが再現される。

飛島の夏祭りは、瀬戸内海で一般的に見られる祭礼の形態を取る。その中に古態と思われる部分が伝えられている。本稿ではこの祭

りの概要を紹介し、来訪してくる神霊を具體的な姿で見てきた島の人々の心をさぐる。

一 飛島と島神社

笠岡港から船で約四〇分、笠岡諸島の南に位置する飛島は大飛島と小飛島の二島から成る。西側の大飛島は周囲五・五km、〇・九kmの海峡を挟んで東側に位置する小飛島は周囲二・八kmである。小中学校や公民館は大飛島にあるが、両島は同一の生活圏を形成している。

飛島の現在の主たる産業は海運業である。しかし過疎化が進み、平成一二年年度の国勢調査によると八九世帯二〇六人で、高齢者の割合も高い。

島神社は小飛島の西側、集落からはずれた山の中腹に鎮座する。神社に向って石段が続き、集落に面した南東に向けて社殿が建てられている。山の斜面を造成した境内地には約一〇m四方の広場がある。

社殿の横には数個の巨石がある。小祠が置かれている状況から磐座として信仰されていることがわかる。注目したいのは高さ約二〇mの巨石が、海に広い平面を向けていることである。大飛島から船で訪れた私の目にまず入ったのは、太陽の光を受けて輝くその巨石であった。西面する巨石は、古い時代から船

を繰る人々たちにとって重要な目印になったことだろう。

対岸の大飛島には、かつて干潮時に小飛島に向って延びる砂州が現れた。幅約一〇m、長さ三五〇mの砂州の出現は、古くから人々にとって驚きであったようであり、砂州の根元に当る地点から五面の鏡と数点の三彩小壺、皇朝銭など多数の遺物が出土している。奈良時代から平安時代にわたるこの遺跡は大飛島遺跡と名づけられ、国家によって航行の安全を祈願した祭祀が行なわれていたと推測されている。この砂州は開発事業によって三〇年程前に消滅したが、地元の人々には今なお強く記憶されている。砂州の形態は風や潮の流れによって左右されるが、その先端は小飛島の島神社をさしていたという。砂州の出現とその先に位置する巨石が、古代の祭祀を創出させたともみられることも可能である。中世以降、

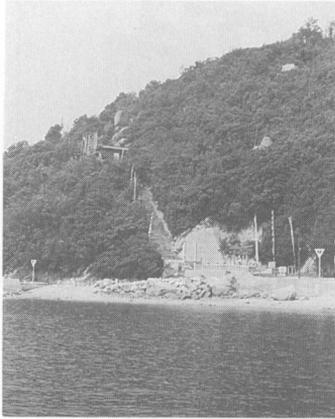


写真1 山の中腹に鎮座する島神社と磐座

巨石の傍らに氏神が鎮座するようになった背景には、このような自然現象への畏敬の念が存在していたからであろう。そこには海に生きる人々が願った、海上での安全航行の重みを読み取ることができる。

二 祭礼の概要

祭礼に先立って、話し合いにより神宿がきめられる。神宿は神饌の準備のほか、笠岡から来る「太夫」と呼ばれる神職の食事や宿泊の世話をする。主人は「当番」と呼ばれ、金幣を持って祭礼の間、後述する「御道具持」とともに神輿と行動を共にする。なお神宿の庭には二本の竹を立て注連縄を張り渡して、そこが聖域であることを示している。

宵宮の日、午後八時半から「お祓い」と呼ぶ神事が執行される。神事の目的の一つに氏子の一年の運勢を占うことがある。太夫が笏に米粒をのせて、一人一人の病気や災難について占う。

夜九時頃に、大飛島の洲ノ本、洲ノ南と呼ばれる地の沖に、翌日の海上渡御の主役となる船三艘が集結する。このあたりは地名の通り、かつて砂州が出現したところである。三艘のうち一艘は神輿を乗せる「御召船」で、小飛島、大飛島の沖浦と尻替の三地区が毎年交替で出す。この年は尻替地区から出された



写真2 宮出しの前に境内で激しい動きを見せる神輿

船であった。御召船はエンジンを持たないため、残り二地区から「先船」と「中船」をそれぞれ出して御召船を曳く。三艘は左まわりに三回まわって小飛島の浜に着く。そして、船上の人々も下船して島神社に参拝する。翌日が本祭である。午前八時頃には氏子たちが集まってきて、狭い境内に人々の熱気が満ちる。太夫や氏子役人による神事が終了すると、御神体が神輿に移される。それを待ちかねたように担ぎ手たちは神輿を拝殿から境内に担ぎ出す。担ぎ手のことをコシモリと呼び、若者を中心にした男性三〇人程で構成さ



写真3 金幣に手を合わせる人々

れている。かつては、一八歳から三五歳までの青年団約六〇人が担当した。神輿は生命を得たかのように、狭い境内で荒々しい動きを見せる。神輿を担いで動きまわることをもムと表現しているように、神輿の上下の動きには一定のリズムがある。太鼓の音が連打され、神輿の飾り金具のぶつかり合う金属音が響く。そしてコシモリたちの「オリヤ オリヤ」のかけ声とともに、見物する女性たちの囁し声、暴れまわる神輿から逃げる人々の悲鳴などが入り混じり、騒然としたハレの空間が出現する。この間約二〇分。



写真4 海上渡御(左から先船、中船、御召船)

境内での練り込みの後、神輿は長い石段を下って浜のエビス神社に向う。エビス神社の前では当番と「御道具持」と呼ばれる長老の一行が神輿を待っている。神輿の「動」に対し、御道具持の「静」がきわ立つ。私は、この場面に古い祭礼の名残を認めた。これについては節を改め検討したい。エビス神社での簡単な神事後、再びコシモリに担がれた神輿は当番と御道具持の周囲を右まわりにまわって御召船に向う。船に乗るまで前進と後進を繰り返し、海の中に入っ



写真5 沖浦の御旅所 エビス神社

な神輿の動きはすべて神霊の意思を表現しているときみなされている。しかし、祭りを進行するためには神輿の動きを管理する必要がある。この役割を務めるのがサイリヨウである。サイリヨウは「宰領」から出た呼称であろう。小飛島と、大飛島の沖浦、尻替から五〇代中頃の男性が一人ずつ出て、この役を勤めることになっており、神輿の巡行に関して大きな権限が与えられている。とくに御召船を出す浦のサイリヨウは、祭礼の執行に全責任を負わなければならない。

神輿を乗せた御召船が、小飛島の浜を離れ

たのは午前一〇時をかなり過ぎていた。吹流しを高く掲げ、小旗や堤燈で装飾された御召船が、少し簡素ながら同様の飾り付けをした先船と中船に曳かれて真夏の海上を進む。時々御召船のコシモリたちが打つ太鼓の音が響く。

飛島には「七浦七戎」と呼ばれる、エビス神社が鎮座する聖地が七カ所ある。このうち一カ所が島神社が鎮座する小飛島にあり、残り六カ所が大飛島の浦々にある。各々の聖地の沖では三艘が左まわりに三回旋回する。このうち神輿が上陸するのは沖浦と尻替のエビス神社が鎮座する浜で、御旅所と呼ばれている。

二カ所のエビス神社の沖を過ぎて、最初に上陸するのが沖浦の御旅所である。浜に到着後も神輿は前進と後進を繰り返し、エビス神社前の神輿石の上に安置されるまで半時間を要した。太夫の祝詞や祓いのおと、神輿の前に神酒と神饌が供えられる。神事の時間は短い、このあと神輿は海に入ったまま動きを止め、乗船しようとしなない。これも神霊の意思ときみなされる。サイリヨウに促されて、ようやく出発となる。十二時に上陸した尻替でも同様の神事が執行され、ここで昼休みとなる。

出発に向けてコシモリが集まり始めたのは、午後四時を過ぎていた。そして神輿を担いだ

あと乗船するまで、海に入ったり練り込みを繰り返すなど約一時間を要した。とくに船に半分神輿を乗せては後戻りする行為を繰り返す時など、コシモリが神輿を操作していることがわかっていても、見物する我々には神霊の意思が働いているように思えてくるから不思議である。祭りが作り出す独特の雰囲気があるように思わせるのだろうか。

尻替の出発に当たっても御道具持の一行が浜に整列し、神輿を見送る。このあと船は、二カ所の聖地の沖を巡る。このようにして小飛島を出発した神輿が、大飛島を一周して再び小飛島に戻ってきた頃には日没が近づき、午後六時をまわっていた。そして浜のエビス神社前で簡素な神事のおと、再び練り込みをし、本社に宮入りしたのは午後八時である。神輿の御神体を本殿に移し、長い一日が終わった。

三 神来訪の残像

前述したように神輿が荒々しい動きをする中で、際立つのが「当番」と数人の「御道具持」の一行の静けさである。当番は紺の袴姿、御道具持は白い着物に黒帯を締め、水色の法被を羽織っている。この法被を着るようになったのは近年のことであるという。頭には小型の笠をかぶっている。そして当番は金幣、御

道具持は各々猿田彦の面をくりくりつけた篠竹「島明神」と染め抜いた旗、鉾、弓、矢などを手にしている。「御道具持」の名称は彼らの姿を直接的に表現したものである。

古式を伝える祭礼の渡御行列では、先頭に猿田彦を配し、随従の人と神輿が続く。飛島の事例でも海上渡御の際、先頭の先船に猿田彦の面を持つ人が乗りこみ、他の御道具持は次の中船で随う。これらの人々は神輿が御旅所に上陸する際には、浜で待機して迎える。また神輿が小飛島や御旅所のあるエビス神社前で練り込む間は、ひとかたまりになってたずんでいる。時々、神輿がそのまわりを練りこむ。祭礼の中で主役を勤めるのは、一見すると神輿とコシモリであるが、村人たちは神輿ではなく当番や御道具持に手を合わせて拝礼する。当番は神霊の依代である金幣を持ち、これとセットになった御道具持は神霊を迎える側に立ちながら、実は神霊を具現化したものとみなされているのである。御道具持を神霊と重ねてみる視線には、神霊に荒々しさと穏やかさの二面性を認め、前者を神輿、後者を御道具持によって表現してきた意識を読み取ることができる。なお、このような役割を果たす御道具持には聖性が必要である。コシモリやサイリョウを勤め上げた長老たちが選ばれることで、その条件を満たしている。

飛島の夏祭りには、海のかなたから来訪する神霊を迎えた漁民の信仰が息づいている。その神霊の姿が笠をかぶった異相の御道具持

として伝えられている。

(〒630-8133 奈良市大安寺一―十一―二十八)

第二八回合同調査

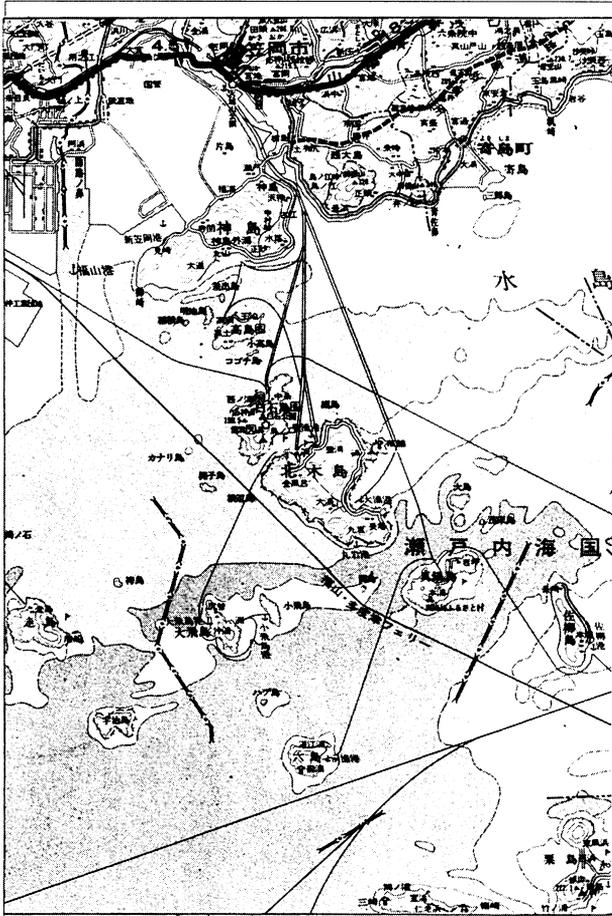
調査地：岡山県笠岡市飛島（大飛島・小飛島）・六島

調査幹事：高原一朗

調査参加者

五十嵐 稔 齋部 功 内田 健一

遠藤 鉄平	折橋 豊子	車 葉子
小林 幹子	佐志原圭子	下境 芳典
白井 正子	神 かほり	鈴木 秋彦
高原 一朗	田中 斉	谷川 隼也
津山 正幹	長野 晃子	早瀬 哲恒
廣瀬 勲	福島 閑子	丸山 久子
むらき数子	森 隆男	山崎 祐子



大飛島・小飛島・六島の位置